

稲作速報

第6号
(稲作相談会資料)

発行 JA金山
営農部

・7月の稲管理
・営農情報他

草丈は平年値、莖数はやや少ない 稲生育は「平年並」の生育状況へ！

田植え時期は気温が高い日が続き、稲の初期生育は順調に推移したが、今年も5月末から6月初旬に「ワキ」が発生し、田干しや水交換等の対応をした圃場が見受けられた。6月中旬から梅雨入りしグズついた天気が続いており、稲の生育は概ね平年並となっている。

7/2現在の、はえぬきの平均生育調査結果は左表となり、草丈は平年並、莖数はやや少ない。また、葉令は0.4葉多い状態。生育進捗も平年並みで、生育相は「短稈・やや穂重型」の傾向と見られる。6月中旬に入り若干の低温と雨が続き、生育は一時停滞したもの、その後気温が高くなり生育は戻ってきている。また、出穂予想は「やや早い」と見込まれ、平坦部のあきたこまち・ヒメノモチの早生品種は、7月末に出始める予想となっている。

7月は「施肥・防除・水管理」の大切な月！

現在、生育は順調で葉色が濃くなってきたり、徐々に中干し、穂肥の時期を迎えてきている。今後の穂肥(分施)対応については、「例年より早い時期に通常通り散布」の方向で進めたよう。色がさめてからの穂肥は遅れてしまう場合があるため、色がさめる前に穂肥を施し、遅れないようにしたい。また、昨年同様にワキの目立つ圃場が多いため丁寧にガス抜きをするために例年より少し長めの田干し期間を取りたい。

病害虫発生については、今のところ葉イモチ病の発生は見られないが、「油断は禁物」である。カメムシ対策と合わせ、最後まで徹底した防除体制で望みたい。7月は稲にとって最も大切な時期。今後も中干し・作溝・間断かん水・穂肥・防除と続くが、引き続き適期作業と適切管理を進めていこう。

7/2生育調査結果(はえぬき)

		R1	H30	H29	平年
6/1	草丈 cm	25.5	21.9	23.3	20.9
	莖数 本	6.2	4.9	5.5	5.4
	葉令 葉	5.1	4.7	4.4	4.3
6/10	草丈 cm	29.6	27.9	26.8	28.0
	莖数 本	11.3	6.7	6.8	8.1
	葉令 葉	6.4	6.0	5.2	5.9
6/20	草丈 cm	33.5	33.8	30.7	34.0
	莖数 本	18.0	13.4	11.1	17.8
	葉令 葉	7.8	7.9	6.7	7.7
7/2	草丈 cm	45.5	44.1	36.5	44.3
	莖数 本	25.4	22.7	21.5	27.3
	葉令 葉	9.6	9.7	8.3	9.2

7月の稲作管理(穂肥対応等)

作業計画	7/1	7/5	7/10	7/15	7/20	7/25	8/1	8/5	8/10		
作業計画	- 中干し・作溝・除草剤対応		穂肥①	穂肥②	間断かん水		穂イモチ防除	出穂期			
穂肥計画(主な品種)	《金山平均》		※LPコート(あきたこまち)	※LPコート(はえぬき)	穂肥① ヒメノモチ あきたこまち (7/10頃)	穂肥① 美山錦 出羽燦々 はえぬき 雪若丸 (7/13頃)	穂肥② あきたこまち ヒメノモチ (7/20頃)	穂肥② 美山錦 出羽燦々 はえぬき (7/23頃)	8/2 出穂期 あきたこまち ヒメノモチ	8/5 出穂期 美山錦 出羽燦々	8/7 出穂期 (はえぬき)
			葉イモチ防除	アゼ草刈終了(7/20)			カメムシ防除				

※出穂予想は節間長より判断の為おおよその目安(「平年比△2日」)。又上記は町平均なので、平坦部は2日早目、山間部は2日遅目とする

I 穂肥(分施) ~適期・適正穂肥量で!~

1、LPコート肥料での散布 …出穂約30~33日前に

LP肥料は、徐々に溶出し稲体吸収となり、葉色の出方は遅くす目の傾向となるので、LPコート30は出穂前30~33日に、10a当り10kg(1袋)散布し、その後の分施(NK)は、ムラ直し程度とする(前号参照)。

2、化成肥料での散布 …正確な判断は「幼穂長」にて確認。(裏面参照)

1)穂肥①:幼穂形成期(出穂前25~20日)で、幼穂長約1~3mm(親茎を切った見える)の大きさになったらNK化成であれば10kg前後/10a散布。尚、適期穂肥のできる稲姿は、葉が立ち、葉色がさめ、「草丈60cm以下、莖数27本/1株以下、葉色4.8以下」が目安。特に、葉色濃目の時や莖数の多い田(30本/1株)は4~5日遅目の対応とし、施肥量もやや少目とする。

2)穂肥②:穂ばらみ期(出穂前15~10日)で、止葉の葉耳間長が-10cm~+10cm頃で、NK化成であれば5~7kg/10aとする。但し、この穂肥は、葉色低下を防ぐ施肥となるので、生育量、天候等を考慮し無理はしない。尚、穂ばらみ期以降の施肥は、品質・食味に影響が出るため行わないこと。

栽培区分	肥料名	施肥①	(施肥②)
一般栽培(全品種)	NK化成C68他	10kg前後	(5~7kg)
特別栽培(ヒメノモチ・出羽燦々)	尿素有機入り化成200	15~20kg	-

3、留意事項

- ・今年土壌窒素量が平年並の予想だが、色がさめてからの追肥はしない。
- ・あきたこまち・ヒメノモチは「やや倒伏しやすい」ので、穂肥は少し遅め(2~3日)。
- ・美山錦・出羽燦々は「倒伏防止」も前提となるので、穂肥は出穂前20日とし、倒伏軽減剤(スマレクト等)の散布は、生育量を考慮しての対応(7/20頃)。
- ・尿素有機入り化成200は有機質50%で、緩効型の長効きタイプなので穂肥①は3~4日早目とし、穂肥②は省略出来る。

II 防除 ~早期発見早期防除~

1、イモチ病 -予防散布を中心に、万全を期す-

○葉イモチ防除: 現在、葉イモチ病の発生はないが、「油断禁物!」、また、万一補植苗がある人は至急処分する。
・箱処理剤(フイグットパティート・スタウトダントツ等)やオリゼメート等散布田では、発生がなければ7/下まで省略できる。

薬剤	治療+予防	主に治療	主に予防
	ブラシン・ノンプラス	カスミン	ヒーム

○穂イモチ防除: 粒剤散布の人は、7/15~7/20に、コラトップ粒(1kg剤@1,980)等を1袋/10a散布。粉・液剤は出穂直前(7/下)からの散布予定で。(次号で)

※「カスミン」剤は、「穂揃期、までの使用です。」

2、カメムシ -斑点米カメムシ類発生「平年並み」-

県防除所の発生予察情報(6/29)では「平年並」の状況となっており、今年の発生密度は「平年並」の見込み。

○防除: 畦畔(アゼ)等の草刈りは出穂前(7/20頃)までとし、8月いっぱい草刈りはしない事とする。薬剤散布は穂揃期と穂揃後7~10日更に7~10日後の3回予定(次号で)。

III 水管理 -土壌水分は常時維持-

- ・中干し...田植が遅い等で莖数の少ない田んぼは、目標莖数の確保後又は幼穂形成期前に軽く行なう。
- ・間断かん水...中干し以降の水管理は、「足あとに水がたまる」程度に、「2日湛水2日落水状態」を目安に管理する。
- ・尚、幼穂形成期以降(7/5~)の低温時(最低気温17℃以下)には、深水管理にて不稔発生回避とする。

～ 生育調査より～

- ・10日間の平均葉令増加数は1.8葉と平年並であった。6月中旬の若干低温が入ったことで生育は一時停滞したが、その後気温が上がり生育が回復し、茎数は確保されてきている。
- ・昨年に比べ、葉令の展開は進んでいるものの生育自体はそれほど急いではいないため、出穂は若干早めの状況になりそう。
- ・現在、徐々に中干しの時期に入ってきており、茎数が確保できたほ場からガス抜きのため例年よりも少し長めの中干し期間を取りたい。
- ・葉色はSPADの数値で、現在は40～42ほどが適正值内。全体的に色が出てきており、葉色は濃いめの状況。

水稻生育調査結果表(7/2)

地区	品種	田植	草丈(cm)		茎数(本)		葉令(葉)		葉色	
			今年	前年	今年	前年	今年	前年	今年	前年
檜台	はえぬき	5/19	41.7	40.1	15.9	12.1	9.0	9.7	42.8	41.1
上台	はえぬき	5/19	53.5	46.0	27.0	25.8	9.4	9.8	41.0	40.5
山崎	つや姫	5/14	53.1	54.4	23.7	19.3	10.2	10.0	45.4	39.4
大又	はえぬき	5/12	50.2	49.1	35.7	27.9	9.9	10.2	37.7	40.8
板橋	はえぬき	6/3	37.4	40.5	14.0	16.5	9.5	8.1	42.5	42.4
朴山	つや姫	5/18	45.5	42.6	27.1	23.3	9.9	9.8	41.7	42.7
荒屋	出羽燦々	5/24	50	50.7	30.6	23.6	10.5	10.4	41.9	43.0
凝山	出羽燦々	5/17	52.8	51.0	23.2	24.8	10.9	10.4	42.8	39.7
菅越	あきたこまち	5/20	53.6	52.7	19.3	29.0	10.1	10.3	47.0	40.9
稲沢	はえぬき	5/18	42.8	40.7	30.4	22.6	9.7	9.7	42.3	42.0
片貝	出羽燦々	5/15	49.1	—	19.0	—	10.1	—	38.2	—
春木	はえぬき	5/15	58.6	42.2	32.2	30.8	10.1	10.2	44.3	43.8
小蟬	はえぬき	5/20	44.0	50.1	25.9	21.2	9.7	9.2	42.6	43.2
柳原	はえぬき	5/18	42.2	44.9	28.7	25.2	9.1	9.5	42.2	41.9
蒲沢	あきたこまち	5/19	48.5	47.5	30.4	23.2	9.4	9.9	43.8	41.3

～ 営農トピックス ～

< 穂づくり - 幼穂の発育段階 - >

発育区分	葉齢指数	完全葉13枚	幼穂長	特 徴	出穂前日数			
穂首分化期	76～78	9.5～9.9		葉が丸みを帯びてくる。節間伸び始める。	33±2			
幼穂形成期	一次枝梗分化期	80～83	10.2～10.6		27±2			
	二次枝梗分化期	85～86	10.9～11.6	0.5～0.9mm	成長点に白毛が表れ、幼穂が肉眼で見え始める。	25±1		
	えい花分化前期	87	11.1	1.0～1.5mm		22±1		
	えい花分化中期	88～90	11.2～11.6	1.5～3.0mm	幼穂長1mmをこえるとえい花分化期にはいる。節間長は5mm以上。	19±2		
えい花分化後期	92	11.9	3.5～15.0mm		18±1			
生殖細胞形成期	95	12.3	1.5～5.0cm		15±1			
穂ばらみ期	減数分裂期	97	12.6	5.0～20.0cm	葉耳間長-10cm頃から始まり、止葉の葉耳が見え始める頃盛期となり、+10cm頃に終期となる。えい花の長さ4mmで盛期となる。	12±1		
花粉外殻形成期				100	13.0	全長	葉耳間長は10～12cm。えい花は全長に近づく。	9±1
花粉完成期				100	13.0	全長	葯黄変し、えい花全長となる。	6±1
出穂期	100	13.0	全長					

= 営 農 情 報 =

1. 令和元年産米契約まとまる!

契約数量70,888.5俵(前年比98.0%)

5月28日より始まった今年の米契約がまとまり、下表が品種毎の契約数量。全体としては前年より1418.5俵少ない(前年比98.0%)契約内容となっており、昨年までの不作の影響で全体的にやや控えめの契約状況となった。主食用米については面積が増加した「雪若丸」が2,490俵増え、「はえぬき」、「あきたこまち」が減少した。また、今年度は農林水産省からの備蓄米の買取価格が上昇するとの情報を受け、備蓄米を2,000俵増加した。下表には表示されていないが飼料用米は昨年より微減の75haとなった。

なお、契約栽培品目は全体の約98%を占め、今後この米契約をうけ販売先(契約先)との、細部に渡る検討・協議を進めて行く事となる。

品種別契約数量

品 種	契約数量(俵)	比率(%)	※30年産契約数量	前年比率(%)
はえぬき	24,991.0	35.3	28,882.0	87
あきたこまち	2,873.0	4.1	3,466.0	83
つや姫	4,594.0	6.5	4,419.0	104
雪若丸他	7,621.0	10.8	5,131.0	149
出羽燦々	11,053.0	15.6	11,464.0	96
美山錦他	3,868.0	5.5	3,918.0	99
ヒメノモチ他	3,194.5	4.5	4,277.0	75
備蓄用米	12,000.0	16.9	10,000.0	120
加工用米	694.0	1.0	750.0	93
合 計	70,888.5	100.0	72,307.0	98.0

2. 「特別栽培米：つや姫・出羽燦々」案内

先に提出された出荷申込(契約)書にて、特別栽培「つや姫・出羽燦々」の栽培者の方には後日ご案内(7/10外務にて)しますが、栽培基準を遵守し、以下の予定でお願いします。

○7/26まで 看板の設置

○8/上 現地ほ場審査(予定)

○8/31 栽培管理記録表の提出

※ 一般米の栽培記録表は、米出荷時に提出して下さい。

3. 一新品種紹介 PART II

◎ 「雪若丸」:今年度作付が85ha程に拡大され、町内各地で作付けされました。出来秋の収穫が待ち遠しい所ですが、令和2年産も栽培面積を拡大の予定がありますので、**生産者の募集については後日皆様へご案内いたします。**

◎ 「雪女神」:今年も上台:今田政男さんにて110a、持越:松澤信矢さんにて120aの他、町内で合計5人の生産者で栽培中です。県産初の吟醸酒用として期待されています。

～ 稲作用語講座 Vol. 4～

今回で4回目を迎える「稲作用語講座」、これから夏本番となりますが、暑さに負けず無理をしない作業計画で進めていきましょう。今月は「穂肥編」です。

一 穂肥(分肥)一

稲の穂の発育に必要な栄養を補給する目的で出穂(しゅつすい)の約25日前に施される肥料の事で、その頃ちょうど茎の基に幼穂(ようすい)と呼ばれる小さな穂が形成されている時期です。穂肥は1本の穂に実るもみの数を増加させるほか、葉の光合成能力を高め、もみの念実を良好にする効果があります。稲による穂肥の吸収利用率は基肥よりも高く、施用された窒素成分の70～80%が吸収利用されることが多いです。※作付けしている品種によって若干時期が違います。(表面参照)

また、この時期にケイ酸資材を稲に施すことで、食味値の向上や収量増が期待できることが分かっています。近年、農業用水に含まれるケイ酸が非常に少なくなっており、稲体が吸収するケイ酸分が低くなっていることから、「ケイ酸植物」と呼ばれる稲にとっては物足りないのかもしれない。春に施す土壌改良剤はもちろんです、この機会ケイ酸資材を使ってみてはいかがでしょうか?

～次回は収穫前までの防除・管理編の予定です～